

地域色のある宝篋印塔

ほうきょういんとう

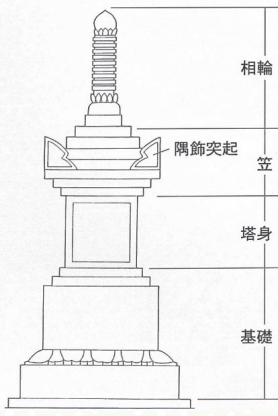
町内を歩けば、路傍や山中など至る所で古い石造物を目にします。佛像や供養塔、道標、記念碑など様々な種類がありますが、その中の一つに「宝篋印塔」という石塔があります。宝篋印塔は、元々は中国で仏塔として造られたものが、日本では鎌倉時代に石製の墓塔・供養塔として普及し、鎌倉時代中期から室町時代にかけて多く造られました。町内で

も古い墓地などで見ることがありますが、塔身や笠などパーツごとに制作されたものを組み合わせているものなので、長い年月の間にバラバラになり、欠損したり他の宝篋印塔や同時代に普及した五輪塔のパーツを適当に組み合わせられた状態が残るものが多く、制作当時の姿を残すものはほとんどありません。宝篋印塔は本来、塔身の部分は立方

体や直方体の石材を用いるのが一般的なのですが、この塔身に六角柱でそれぞれの面に地藏菩薩を一体ずつ計六体を刻んだ「六面石幢」が置かれているものが点在します。町内では、富地域の楠、富西谷の余川・篠坂・名越、奥津地域の羽出の西前田・東前田などで確認されています。杉の下杉にもかつては存在したようです。これらは、おおむね七〇〜九〇cm程度でそれほど大きくはありません。また、五輪塔など近隣の石造物を寄せ集めて祀っている場所に存在することが多いため、前述のように色々な石造物のパーツを後世に適当に組み合わせて造られたようにも思えますが、笠の裏面には、六面石幢をはめ込むことができるように六角形のくぼみを彫り込んでいるものもありますので、笠部と石幢部は元からセットで造られたことがわかります。

方面から伝わった花崗岩系の石造物とは別系統の蒜山系の安山岩を石材とした石造物が県内に存在するとして「蒜山式宝篋印塔」（仮称）を提唱しました。同氏は、北九州方面の石造文化が山陰経由で伝わり、この地の石造文化に何らかの影響を与えたものが蒜山式宝篋印塔であるという推測をしています。

町内における蒜山式宝篋印塔を見ると、分布については、古くから山道の脇道として真庭地域と密接なつながりのある富地域と、富地域に近接し、かつては直接往来することのできた地域に存在します。石材については、特に塔身の六面石幢部分は花崗岩ではなく安山岩質の石材で造られているものが多く、これらが蒜山地域の安山岩製かどうかは見極めていませんが、分布状況や共通する事項から蒜山地域から持ち込まれた、あるいはその影響で制作されたものであることは間違いのないでしょう。今回は数ある石造物の一つを例に挙げましたが、こうした石造物からも文献には残されていない中世の人々の動きや、物資の流通、文化の広がりを測り知ることができます。



宝篋印塔の部分名称



楠の蒜山式宝篋印塔



左：名越の蒜山式宝篋印塔（町指定文化財「皇子の墓」）
右：笠裏の六角形の彫り込み



羽出東前田の蒜山式宝篋印塔

【参考文献】「富村の石造物『奥津町の石仏』『仮称「蒜山式」宝篋印塔の存在』」

鏡野町教育委員会 生涯学習課 日下
電話(0868)54-7733